

## 京都大学霊長類研究所創立 50 周年記念式典

小嶋祥三

霊長類研究所創立 50 周年の記念式典が 6 月 1 日に犬山市の名鉄犬山ホテルであった。式典では犬山市、文科省、京都大学からの来賓祝辞があり、ゴリラの研究者の山極京大総長の講演があった。その後、祝賀会では、いろいろな方面の方々の祝辞があり、最後に霊長研所長経験者（杉山、小嶋、松沢）が祝辞を述べた。所長経験者は自分らが行ったことに祝辞を述べることになる。これはちょっと違和感があるなと思ひ、わたしはこれからの若い研究者への期待を話した。その主旨を以下に示す。例によってアガッテしまったので、この通りではないが。

\*\*\*

霊長類研究所はめでたく 50 年を迎えましたが、これからの霊長研は若い研究者の手の中にあります。1 月のシンポジウムでは、この点に関して、主に教官に希望を述べました。今回は助教や大学院生など若手の研究者に希望を述べて、霊長研 50 周年記念の言葉としたいと思ひます。一言でいえば、若手研究者には、何よりもまず、自分の学問の世界を築いてほしいということです。

若手の研究者にとって重要なのは、他者のことは気にせず、自分の研究をオモシロイ！と思ふこと、常に研究に夢を持つこと、そして良い意味での思い込みです。すなわち、自分の学問の世界を持つことです。この気持ちがないといけない。研究には運、鈍、根が必要と聞きます。鈍と根は自分の研究をオモシロイ！と思っていれば特に問題ないでしょう。そして、大切なのが運です。運は成功した多くの研究者が言及するものです。長い間研究をしていると、考えてもみなかった結果に遭遇することが必ずあります。その中には研究の発展の重要な手掛かりになるものがあります。それを見逃さないことが、すなわち、運をつかむことなのです。運をつかむことは柵から牡丹餅が落ちてくるのを待つことではありません。先入観や偏見をもってデータをみたり、ある結果を強く願ったり、性急に結果を求めたりすることは、データに対するアンテナの感度を悪くし、つかめる運も逃してしまうと思ひます。

若手研究者には、他者の評価など気にせず、自分の興味を追求して行って欲しい。それがこれからの霊長研を支えると信じています。以上です。

\*\*\*